

明治維新とフランス革命の類似

－ 日本史の独自性神話批判 －

グットマン・ティエリー

要旨：明治維新、フランス革命、いずれにおいてもかなりの血が流され、革命の前後という時期の差こそあれいずれにも恐怖政治が存在し、その後両革命はともに権威主義政治体制へと展開し、また日本もフランスも、新国民国家統一のために類似した様々な措置や政策を講じている。したがって、思われている以上に、明治維新とフランス革命の間には類似点が数多く存在している。ひるがえせば、日本人論思想において主張されているほど、「革命（維新）」という歴史的な分野の場合においても日本の独自性は認められないと思われる。

Résumé : Pendant la restauration de Meiji comme pendant la Révolution française une quantité non négligeable de sang a été versée; avant la restauration pour le Japon, après la Révolution pour la France, dans les deux cas un régime de terreur a sévi; les deux révolutions ont toutes deux abouti à la mise en place d'un régime autoritaire; enfin, la France comme le Japon ont pris un certain nombre de mesures et mis en place des politiques similaires afin d'assurer l'unité du nouvel Etat-nation. Aussi, dans une proportion plus large qu'on ne le pense généralement, existe-t-il un grand nombre d'analogies entre la restauration de Meiji et la Révolution française. D'un autre point de vue, et à l'opposé de ce qui est généralement affirmé dans les *nihonjin-ron* (ou «Discours sur les Japonais») - dans ce domaine de l'histoire des révolutions également - il est difficile de souscrire à l'idée de l'exception japonaise.

はじめに：類似を求める比較姿勢

三重大学において、2001年に比較文化・比較政治文化の講義を任されて以来、いわゆる「日本人論思想」を批判して来た。「日本人論思想」というのは「日本人論」という著書のジャンルにおいて共通して見られる日本・日本人に関する幾つかの命題に依拠したイデオロギーのことである。「日本人論」というジャンルの古典として『甘えの構造』、『タテ社会の人間関係』、『菊と刀』等が挙げられる。そして、しばしば語られるその国民性についての典型的な命題には、「日本人は勤勉・従順である」「理性より感情に基づいて行動する」「必ず相手や周囲の気持を察して行動する穏やかな国民である」等がある。欧米人は反対に、「勤勉・従順ではない」「理性に基づいて行動する」「自己中心的である」「暴力的である」等。また、三重大学に就職して以来各授業において、国民性に関する命題を越えてもっと総合的な観点から、日本人論思想の前提である「日本社会・文化は絶対的な独自性を持っている」という神話を批判して来た。

これまでの論文においては、日本とフランス政治史における「個人」の類似した誕生の過程を描写し、指摘した¹。また、フランス語での論文においては、現代日本人のアイデンティティの大部分は日本人論思想によるものであり、その思想を唱えている日本人論による自己実現予言の結果であるという主張もした²。本エッセーでは、しばしば耳にする明治維新やフランス

革命に関する決まり文句を再評価の対象にしたいと思う。それらの決まり文句だけを単純に並べると、明治維新とフランス革命は比較できない程異なる政治事件だったと誰もが感じるだろう。もちろん、言うまでもなく、この2つの重要な歴史的事件においては数多くの相違点も確認できる。例えば、遅塚忠躬氏が分析したように明治維新の場合は、フランス革命と違って「市民社会」が現れて来なかったという点がある³。また、明治維新では、ブルジョア階級の革命家が少なく、武士が主に指導者の役割を果たした。それにしても次の4つの側面を新たに考察すれば明治維新とフランス革命が相当程度類似しているという事実気付くと思われる。

1. 革命（維新）期における死亡者の人数
2. 革命（維新）と恐怖政治
3. 革命（維新）と権威主義的政治体制への発展
4. 革命（維新）と国家統一の危機

また、以上の4点を検討する前に、明治維新とフランス革命の期間および出来事を定める必要がある。幕末における長州との戦争が明治維新の始まりであり、1877年の西南戦争はその終わりであると考え。なぜなら、長州との戦争以前に幕府に対する大規模な抵抗は見られず、また西南戦争以後新政府に対する軍事的な抵抗は見られなかったからだ。そして、フランス革命は、1789年の三部会の開催から、ナポレオンによる1799年のブリュメールのクーデターまで続いたと一般的に思われている。なお、当論文は、比較政治の観点から書かれたエッセーに過ぎず、研究の成果の発表ではない。

1. 革命期における死亡者の人数：無血革命は珍しい

明治維新について、フランス革命と比べてそれほど多くの人が死んでいないと主張している人でさえ、それでも血がある程度流されたことは認めている。そうであれば、なぜ明治維新は「無血革命」と呼ばれるのだろうか。おそらく、最後の将軍が死刑にされなかったことで「無血革命」と一般に言われるのではないかと推測する。それに対してフランス旧体制の王であったルイ16世の首は切り落とされた。しかし、以下、正反対ともいえる両国の最高権力者への処遇が必ずしもそれぞれの国民性と結び付いた必然ではなく、両国において全く異なる歴史の展開・結末も十分にありえたと主張していきたい。

「無血開城」という表現は確かに正しい。将軍徳川慶喜が新政府軍に対し抵抗せずに江戸城を明け渡したという出来事を指している。軍事的な勝利の可能性が十分にあったにもかかわらず、勝海舟からの説得の影響で慶喜は戦を諦め新政府軍に自発的に城を明け渡した。このように慶喜がたまたま屈服を選んだことで血は流されなかった。しかし、逆のシナリオもあり得たのではないか。つまり慶喜が幕府軍の勝利の可能性を信じ新政府軍と戦をし、敗北していれば、その結果勝者によって処刑された可能性は十分にある。一方、フランス革命においては、ルイ16世は新政府に逆らい処刑された。これは動かしがたい事実である、しかし、それとは異なる展開は本当にありえなかったのだろうか。この可能性を知るために簡単にルイ16世の革命後の態度を振り返る必要がある。

1789年7月14日以降、1791年6月までの間、つまりほとんど2年間、ルイ16世は処刑さ

れることもなく、革命政府と協力関係にあった。新しい憲法を認め、「フランス王」から「フランス人の王」になった。つまりその期間、イギリスのようにフランスの政治体制は立憲君主制であった。しかし、ルイ 16 世の反革命の意志は完全に消えていなかった。6 月 20 日の夜に王は家族と一緒にパリから逃げることにした。目的は未だ健在な反革命軍のもとに逃亡することであった。しかし、王とその家族はヴァレンヌで捕まり、パリへ送り返された。その時点で、ルイ 16 世は革命側にとって信頼できない存在になり、革命の裏切り者として扱われるようになる。やがて、1793 年 1 月 21 日にコンコルド広場でギロチンによって処刑される。このことからルイ 16 世の場合でも、徳川慶喜と同様に、違う結末が十分ありえたことが伺える。ルイ 16 世が逃走を断念し、革命政府のもとに留まり協力体制を維持・強化していれば、イギリスのような立憲君主制がフランスに根付いた可能性は十分にある。その結果、フランス革命もまた「無血革命」と呼ばれたかもしれない。

しかし「ルイ 16 世と徳川慶喜の処刑の有無が運命のいたずらだったとしても、フランス革命で死んだ人の人数は明治維新と比べてはるかに多くこれは偶然ですまされないのではないか」という反論がなされるかもしれない。では、両革命における死亡者の数について考えてみよう。

フランス革命のひとつのシンボルであるバスティーユの陥落では、市民側の死者は 100 人程度、監獄の警備に当たっていた側の死者は数人だけである。また地方でも革命に抵抗する反乱はほとんど無く、当然これらに付随して死亡する貴族も農民もほとんどいなかった。フランス革命の場合は、ヴァンデの反乱を入れるか否かによって死亡者の総数は大きく変わってくるという点を指摘したい。ヴァンデの反乱 (Rébellion Vendéenne) というのは、フランス革命期に発生した王党派の反乱である。フランス西部にあるヴァンデ地方の農民たちによって行われた反乱であり、1793 年に始まり、1796 年に終わる。死亡者の人数は 20 万人を超えているとされる。しかし、ヴァンデの反乱をフランス革命に入れるか否かフランスでも議論の対象になっており、数に入れなければ、明治維新で亡くなった人の人数とそれほど大差はないと思われる。革命真最中にギロチンで処刑された人の人数は 2 万人以下だとされている。これに対して明治維新での死亡者数は正確な数字はないが、維新との関係で血が流された事変、反乱、戦争は決して少なくなかったことは誰もが知っている事実である：幕府による長州征伐、京都における新撰組や見廻り組による殺し合い、戊辰戦争、西南戦争等々。

結論として言えるのは、長い間続いた政治体制や社会秩序がひっくり返される場合、血が相当程度流されるという展開が普通であり、フランス革命同様、明治維新も、その点に関して決して例外ではないということだ (チェコスロバキアにおける 1989 年のいわゆる「ビロード革命」はまさに例外であった)。ゆえに、明治維新を「無血革命」と呼ぶことはあまり適切ではないと言えるだろう。

2. 革命と恐怖政治

フランスでは、フランス革命と言えばギロチンによる大量の首切り、恐怖政治がイメージされる。明治維新は普段そのようなイメージを伴わない。しかし、果たして、本当にそうであろうか。

革命後、フランス国内には政治的な混乱に加え、外国の軍隊による大きな脅威が存在していた。具体的に言えばフランス周辺の王室らは革命の火花が自国に広がらないようにフランス革

命を直ちにひっくり返す必要があると判断し、フランス革命軍と戦争を始めていた。日本も黒船来航以来それとよく似た状態に陥っていた。尊王攘夷派と開国派を軸とする、国内の政治的対立に加え、欧米列強が中国や東南アジアにしたのと同様にいつ日本に対して植民地化を始めるのかという外への大きな不安が日本全体に常にあったと考えられる。

フランス革命当時の政府は国内の反革命勢力を弾圧し、また敵の国々と関係ありそうな人物を次々に逮捕し、裁判を省略して処刑した。一方日本では、京都で新撰組や見廻組の鎮圧活動による恐怖が漂っていた。当時の日本のギロチンはこの2つの組織における武士の刀だったのではないか。

フランス革命の恐怖政治は革命後の政治であり、明治維新の恐怖政治は明治維新以前の政治であった。しかし、その違いを除けば、類似する側面が間違いなくあるだろう。恐怖政治は社会事情が混沌状態に陥った時に必ず現れて来る現象だろうか。特に当時の日本やフランスのように内外の敵の脅威にさらされている時に起こる現象かもしれない。

3. 革命と権威主義的政治体制への発展

明治維新後の軍国主義はいつ始まったのだろうか。「この年から、この事件から始まった」とははっきり言えない。おそらく日本の政治体制は明治、大正、昭和を通じて徐々に軍国主義へ向かっていったものと思われる。途中、「大正デモクラシー」という期間があったものの政治的な断絶があった訳ではない。換言すれば、明治維新が長い目で見れば軍国主義体制への道のりの出発点だったとも言えるのではないか。一方、同様に、フランス革命がナポレオンの軍国主義的な独裁体制を生んだと見ることもできる。ナポレオンは元々軍人であり、革命がきっかけで起こったフランスと他の王室との戦争において勝利を重ね、最終的にクーデターを起こした人物である。1789年の革命で始まった不安定な政治・社会情勢は1799年からナポレオンの指導の下で徐々に落ち着いて行く。そして、それも日本と同様だが、国内の落ち着きは外国の占領や帝国の構築と並行して進んでいた。具体的に述べれば、ナポレオンのフランスはヨーロッパの大部分を征服し、帝国を作り、軍国主義の日本はアジアにおいて多くの国々を植民地状態に追い込み、大日本帝国を構築した。もしかすると、大革命の後、政治が不安定な状況に陥ると、その状態を解消するために権威主義的な体制や外国の征服へと展開するという法則があるかもしれない。

4. 革命と国家統一の危機

西川長夫は「フランス革命と国民統合——比較史の観点から」という論文において革命後の明治政府も革命後のフランス政府も国民統合の問題を解決しなければならなかったと指摘している⁴。日本の場合は將軍の代わりに長らく政治的な色が薄かった天皇を新国民国家の頂点に置いた。フランスの場合は革命後いずれの時期の政府も、国王の代わりに国民統合のシンボルとして機能する存在の選定には悩んでいた。現在の共和国では、その頂点にある大統領がその役割を担っている。皮肉にもフランス大統領が居住する建物はエリゼ「宮殿」と称されている。

西川氏は両国における他の国民統合の手段として、言語の統一・方言の排除、徴兵制と軍隊の設立、教育制度、博物館、暦、貨幣、度量衡の統一、国家宗教の成立等を挙げている。挙げ

られた最後の手段は日本の場合「国家神道」という形をとり、フランスの場合「最高存在の祭典」という形をとった。「最高存在の祭典」というのは、キリスト教の教会を否定した革命政府の指導者であったロベスピエールが考えた祭典であり、啓蒙思想に基づいて理性を崇拜の対象にした国民の祝日であった。しかしその直後ロベスピエール自身がギロチンで処刑され、一回きりの祭典に終わってしまった。

おわりに

以上指摘したように、明治維新、フランス革命、いずれにおいてもかなりの血が流され、革命の前後という時期の差こそあれいずれにも恐怖政治が存在し、その後両革命はともに権威主義政治体制へと展開し、また日本もフランスも、新国民国家統一のために類似した様々な措置や政策を講じている。したがって、思われている以上に、明治維新とフランス革命の間には類似点が数多く存在している。ひるがえせば、日本人論思想において主張されているほど、「革命（維新）」という歴史的な分野の場合においても日本の独自性は認められないと思われる。

註

- 1 「日本とフランスの政治史における個人——日本文化の異質論批判」、『法学新報』、第110巻第3・4号、平成15年8月30日発行、287-304頁。
- 2 «L'influence de la pensée *Nihonjin-ron* sur l'identité japonaise contemporaine: des prophéties qui se seraient réalisées d'elles-mêmes ? » (日本人論思想が現代日本のアイデンティティに与える影響：自己実現された予言なのか), *Ebisu (Études japonaises)*, 43, Printemps-Été 2010, p. 5-28.
- 3 「フランス革命と明治維新」、(田中彰編集『世界の中の明治維新（幕末維新論集1）』、吉川弘文館、2001年)、157-174頁。
- 4 『思想』、789号、1990年3月、119-129頁。